

林京子「祭りの場」から「再びルイへ。」まで

村上陽子

はじめに

一九三〇年に長崎県に生まれた林京子は、一歳の時に一家で上海に移住し、そこで成長します。林京子が日本に引き揚げたのは一九四五年二月、十四歳のときのことでした。それから約半年後の八月九日、林京子は学徒動員中に爆心地から一・四キロ離れた三菱兵器大橋工場で被爆することになりました。

自らの生涯に影を落とした原爆に、後に林京子は文学を通して向き合っていました。林京子は一九六二年より「文芸首都」の同人となって文学活動を開始し、「祭りの場」（『群像』一九七五年六月号）で第一八回群像新人文学賞、第七三回芥川龍之介賞を受賞して作家デビューを果たします。その後は原爆体験や上海での生活体験、アメリカで暮らした日々の体験などに基づく作品を多数発表していきました。それらのほとんどは『林京子全集』（全八巻、日本図書センター、二〇〇五年）に収録されています。そし

て二〇一七年二月一九日、林京子はその生涯を閉じました。八十八歳でした。

私の報告では、もう一人の報告者の島村輝さんが「祭りの場」と「再びルイへ。」両作品の関連について論じられることを受けて、まず「祭りの場」に寄せられてきた評価の変遷をたどっていきます。その上で「再びルイへ。」を現在どのような点に注目して読み開くことができるかの考察を行いたいと思います。

1 「祭りの場」批評の変遷

林京子のデビュー作は、先ほど申し上げた通り「祭りの場」（一九七五年）です。これは、戦後三十年の時間を生きた「私」が少女の頃に体験した八月九日を描いたものです。「私」は複数の記録を引用して自らの記憶を検証すると同時に原爆の全体像を示し、自分が逃げた道筋に沿って語りを展開していきます。三十年の間に集積された原爆にまつわるさまざまな言説が「私」の八月

九日の体験と有機的に結びつき、一つの記憶の想起が別の記憶を呼び起こすという連想が幾重にも折り重ねられていく見事な作品ですが、同時代においては必ずしも高い評価が与えられたわけではありませんでした。

たとえば、群像新人文学賞の選者の一人であった井上光晴は、「被爆者自身の記憶さえもようやく埋没されかかっている今日、作者の突きだした文学のなかの事実は重い」としながらも、記録を援用した「つなぎの部分だけ、文学としての効果は弱くなっているのを、作者は知るべきであろう」という批判を付け加えています⁽¹⁾。

「芥川賞選評」(『文藝春秋』一九七五年九月)においても、「十四歳の体験と、四十四歳の現在の作者の観察と、しばしば混同された記述もあり、省略された文章のために、判断しがたい箇所もあるが、なんとしてもこの主題は、激しくわれわれに迫る」(永井龍男)、「作品としては未熟なところ、整理不足なところ、多少の難点はあるが、このような題材の前には、よく書けているも、書けていないものないと思うた」(井上靖)などの評価がみられます⁽²⁾。

「祭りの場」は、戦後三十年の節目の年に登場した長崎原爆の「記録」として評価されました。しかしその一方で、「小説」としての完成度や強度を保ち得ていないという批判も同時に浴びせられたわけですね。

一九八〇年代になると、「祭りの場」の評価はやや異なるものとなっていくきます。まず、黒古一夫は芥川賞選評では批判の対象となつた、被爆当時の十四歳の少女と被爆から三十年が経って四十歳を越えた女性の心情が入り混じっているという特徴を、それまで原爆

を主題とする文学が書いてきたのとは別の方法で原爆を形象したいという「鮮明な方法意識」に基づくものだと評価しました⁽³⁾。

また、被爆者に対する冷めた目線や非体験者の共感を拒む「開き直り」の指摘がされるようになるのもこの頃からです。たとえば、大里恭三郎の批評では次のように「祭りの場」への批判が展開されています。

作者は、描写と描写の間に批評を挿入し、現時点における感懐を述べ、時折、何らかの資料を紹介するといった方法をとっているのだが、この方法では、統一ある一つの世界像を造型することは難しい。たとえば、作者はコマ切れの描写の合間に、「破壊も平和も私の場合家族にしかつながらない。国家は遠い存在だ。」といった批評を加えたり、「書き綴りながら不思議なのは、道ノ尾で買い出した種芋だ。」というふうに、現時点——作中の現在というより、作者の執筆時点の顔を突き出したり、「週刊朝日、長崎医大原子爆弾救護班報告の『爆庄による離』によると」などど生の資料をどこどこに引用したりしているのだが、これでは読者が主人公に感情移入したり、小説の世界に没入したりすることは不可能であろう。／〔中略〕林氏の文体に私がいささか抵抗を覚えるとしたら、それは、氏が地獄を見たという他者には伝達の至難なその特殊な体験を、あえて表現しようと志しながら、一方、心底では、他者の理解は不可能と決めつけて、開き直りのような心境に陥っているような印象を受けるからである。⁽⁴⁾

このように、一九八〇年代には「小説」としての統一性や完成度の議論に加え、当事者／非当事者間、あるいは被爆者間の差異が問題となりはじめていました。

少し「祭りの場」から離れますが、一九八〇年代の初めに中上健次から林京子に厳しい批判が向けられたことにもここで触れておきたいと思います。一九八二年、「無事」という作品の創作合評で、中上は次のような指摘をしています。

中上・変に社会的な発言としてとらえられては困るんだけど、これ〔引用者注・林京子「無事」〕も、読んで、林さんの体質である、文学の場における原爆ファシストとしての性格を、まさにありありと出したものだと思うんですよ。つまり、原爆のことを書けば何かになり得る。まさに「無事」というのは原爆を書いて、自分の中で風化しているものを見もしないで、それから、こんなふうにはエッセーでもない、小説でもないものを書いていけることの「無事」なんだろうと解釈しました。ちよっとひどいんじゃないか。

小説家として認めないというのは、ぼくの自分の小説の書き方からはかたっているわけなんです。ただ、認めないながら、「祭りの場」の、たくさんの資料を使って、言いたいことを言うという緊迫感みたいなものは伝わりますし、その後幾つか書かれたものの、やむにやまれぬ緊迫感というものは伝わるんだけど、そのときもはらんでいた、この人が書いている核時代というキャプションというんですか、そういうものが当たるような時代に、

この人は完全に乗っかつちやつていると思うんです。(5)

これは、林京子が「祭りの場」以降、「エッセー」でもない、小説でもないもの「」を書いて、それが文芸誌に載り続けていることへの批判だったと言えます。中上は、このとき、林京子が「被爆者」として原爆を書き、誰からも批判されない位置を獲得しているという捉え方をしていたのだと思います。私自身は、小説としての枠組みに収まりきらない林京子の作品をこういつたかたちで批判することには疑問がありますし、むしろ原爆について絞り出された言葉にいかを受け止めるのかという読者の側の問題が取り落とされてしまうように感じます。しかし、中上の批判に示されるような「被爆者」||当事者の語りの、非当事者が批判しにくい「正しさ」への反発は、かたちを変えて幾度か林京子という書き手に差し向けられてきたものでした。これは、「再びルイヘ。」の主題の一つともなっています。これについては、後半で触れていきたいと思います。

二〇〇〇年代以降になると、「祭りの場」を優れた文学作品として捉え直し、評価する研究があらわれはじめます。内海宏隆は「林京子『祭りの場』論——序説」(『芸術至上主義文芸』二六号、二〇〇〇年一月)で従来の「祭りの場」批評を詳細に検討し、これまで見てきたような小説以下という断定や統一性の欠如という「祭りの場」への批判に対して、林京子が志したのは統一性のある小説を構成することではなく、「まるごとの原爆」を書くことであつたという立場から反論しました。それは、「祭りの場」に「新しい原爆文学」の可能性を見出そうとする姿勢だったと言えます。また、黒古一夫は『林京子論「ナガサキ」・上海・アメリカ』(日本図書

センター、二〇〇七年、一六一―二二頁）で自らの体験を特権化せず原爆を客観的に描き出す姿勢を「祭りの場」の特色として挙げ、引用された多くの記録を長崎の原爆を多様な視点で捉えるものとして読むことを試みています。

このような先行研究を踏まえ、拙論「せめぎ合う語りの場——林京子「祭りの場」（村上陽子『出来事の残響』インパクト出版会、二〇一五年）では、「祭りの場」への記録の引用は作品の統一性を損なわせるものとしてではなく、「私」の語りと有機的に結びつき、語りを重層化させるものとして捉え直されるべきであると論じました。記録や他者の声が「私」に依り来たることによって「祭りの場」の語りは構成されていますが、その語りが「私」という一人の語り手に収斂されることはありません。当事者が非当事者に対して自らの体験を押しつけているという読者の感覚は、「祭りの場」に潜勢する、整序化され、統一されることに抗う多声的な声の存在に気づくときに退けられていくのではないのでしょうか。

2 「再びルイへ。」を読む

このような林京子への評価を踏まえた上で、「再びルイへ。」（初出『群像』二〇一三年四月）を読み、いくつかの論点について考えていきたいと思えます。まず、この小説のあらすじをたどっておきます。

「再びルイへ。」の語り手である「わたし」は、一九九九年にニューヨークシコ州トリニティ・サイトを訪れ、友人のルイに向けて長い手紙をしたためました。その後、東日本大震災を体験した「わたし」は、ふたたびルイに宛てて手紙を書き始めます。その長い手紙

には、東日本大震災後の政府の対応や福島状況、A子やB子といった被爆者の同級生とのやりとり、二〇一二年七月一六日に代々木公園で開かれた脱原発の集会への参加などが綴られています。

今回、二〇一一年三月一日直後の空気を踏まえた上で、「再びルイへ。」を改めて読み返してみました。東日本大震災直後にはインターネット上にさまざまな情報があふれていました。大手メディアの報道が限定的であったり、信頼できなかったりするなか、多くの人がインターネットで情報を発信・受信し、SNSでつながり、市民レベルでの情報交換が進んでいきました。その結果、ネットを見る人と見ない人で原発事故への危機感が大きく異なる、という状況も生まれていました。また、脱原発デモへの参加の呼びかけや、運動の拡大もやはりネットを通してなされていきました。この、二〇一一年の脱原発運動の展開は、それ以後の、たとえば安保法制強化行採決に抵抗していく国会前の集会などの社会運動につながるものだったと思います。

一方、身近な人との関係において原発事故への不安や危機感を吐露できないという（空気）も生成されていたと思えます。たとえば、家族間、パートナー間で原発事故への認識の違いが生じ、話し合うことが困難な状況は決して珍しいものではありませんでした。だからこそ、デモや集会に参じて言葉を交わし合うことが切実に求められていました。

「再びルイへ。」を読み直してみても、まず気づいたのは、「再びルイへ。」では電話や手紙といった特定の親しい人間との二者間のコミュニケーションが非常に重要なものとして立ち現れていること、そしてそのコミュニケーションのなかで認識の違いを突きつけられ、傷付

いていく過程が克明に描かれていたということです。

この小説全体がルイという友人への手紙の形式を取っているわけですが、ルイと「わたし」は、「富士山が見える同じ海岸線の町」に住みながら「もっぱら電話でのご機嫌うかがい」を続けている関係です。会って話すことも可能な距離に暮らす友人に宛てて、あえて長い手紙が書かれているわけです。

そしてこの手紙では、別の友人に手紙を書き、その後電話でも話すという行為に繰り返し筆が及びます。原発事故の放射能被害が報じられ、放射能が人体に与える影響について説明する役人の口から「内部被曝」という言葉が出たことに「わたし」は強い衝撃を受けます。それまで被曝者たちが「内部被曝」のために「原爆症」を発症し、認定を得るために国に申請してきても因果関係なし、または不明とされて却下されてきたにもかかわらず、国が「内部被曝」の事実を知りながら沈黙していたことに「わたし」は強い怒りを覚えます。その怒りが冷めないまま、「国はわたしたちを裏切った」という怒りを「わたし」は「冷静」なA子に手紙で訴えました。A子もまた、「わたし」と同様に長崎の被曝者です。しかし、A子の返事は予想に反して「わたし」をひどく傷付けるものでした。

待つていたA子からの返事がきました。

「笑っちゃいました。原爆の次は原発か。余裕ですね。あなたはいつも正しい。」

旦那が家を出ていきました。老いの身をこれから如何に生きるか。あなたも私を笑ってください。」

ハガキを読み終わって、震える手でわたしは受話器を取りま

した。(中略)

わたしを震わせている震源は、A子のハガキにある「笑っちゃいました」という語句にあります。(中略)

被爆体験者だから、人間にとつて重大な出来ごとだから、話し、訴えなければ。このことに嘘偽りはない。敬愛する中国の作家魯迅は、隠された人の死ほど悲しいものはない、と学生運動で抹殺された知人の死を悼んでいます。それを笑える人がいる？ いえ。A子が笑っているのは、原子爆弾の次は原発ですか、とあるわたしのこと。裸で人前に立っている自分自身の滑稽さに気が付いていない、わたしのこと。「いつも正しい」わたしは、よい子のつもりでした。

笑いがこみ上げてきました。

ここで、A子の「笑い」が、原爆や、原爆にこだわることに向けられた冷笑ではなく、「いつも正しい」行動を取ろうとする「よい子」の「わたし」への「笑い」だと考えることで「わたし」はなんとか気を鎮めようとしています。

「わたし」はこの後、旦那がなぜ出ていったのかを問うためにA子に電話をかけます。そこでA子は「世間を見廻す余裕などありません」とも言っています。A子の夫は家を出て別の女性と所帯を持つとしており、それが現在のA子のもっとも差し迫った不安なわけです。身近なことに精一杯で、原発事故に怒る「正しき」を持ち合わせていない。そのような状況にA子はあるわけですが、では「わたし」は「世間を見廻す余裕」があるために原発事故に憤っているのか、という問いもここで生じてくるでしょう。

次に引用するのは、「わたし」が原発事故を「みんなの命と生涯にかかわる惨事」だという認識で受け止めていることがわかる場面です。

原発事故の放射能被害を受けた地域の、避難がはじまりました。幼い子供を抱いて、途方にくれている母親たち。立ち退くかとどまるか。考えあぐねている家族たち。青菜が育った畑を残して、飼っている牛や鶏たちを野に放つて故郷を去る人たち。涙ぐむ母親たちにわたしは、お逃げなさい、とにかくお逃げなさい、テレビに向かっていいました。いまは逃げるしかない。関係者たちは想定外などと気楽にいい続けていますが、築いてきた生活の場を捨てるのは、容易ではない。それでも、いまは逃げるのです。できるだけ早く、その場から離れる。福島ので起きている現実には、育ちつつある若い命、大人たち、みんなの命と生涯にかかわる惨事なのです。

しかし、現実の原発事故は「みんなの命と生涯にかかわる惨事」だと等しく受け止められたわけではありませんでした。その問題に「わたし」はA子からの応答を通して直面させられることになったわけです。

そして、A子の手紙に触発されて「わたし」が想起するのは、自分の元夫の「君は筋金入りの原爆コレクターですね、戦争の悲劇はなにも原爆だけじゃあないんだがなア」という言葉です。「わたし」はその人生において、原爆・原発を「みんなの命と生涯にかかわる惨事」だということにこだわり続け、そのためにパートナーや

家族、近しい友人から反発される苦しみや、「みんなの命と生涯にかかわる惨事」の問題が日常生活の重みによって後回しにされていくことへの腹立ちをくりかえし感じてきたのだと言えます。

では、そういう苦しみや腹立ちを越えていくために何が必要なのか。「再びルイへ」の結末部に置かれているのは、二〇一二年七月一六日、代々木公園で開かれた脱原発の集会への参加です。「わたし」は参加を逃していましたが、最終的には電車に飛び乗り、代々木公園に向かいます。

この集会の場面でももしろいのは、集会で誰が登壇したとか、スピーチしたとか、そういうことに全く筆が及んでいないことです。言ってしまうえば、そういった集会の内容は二の次なのです。重要なのはむしろ、その脱原発集会に行くまでの道のりのほうです。

ルイ。駅から公園までの短かい距離のなかで、これほど素直で率直な、人びとの「いのち」への思慕を感じたことはありません。戦後六十数年の年月のなかで、人びとがとった最後の選択なのです。戦いを生き抜いたわたしたちのバトンは、若い人たちに確かに渡っている。感動でした。代々木公園に集まった人たちは七万人、八万人。一七万人ともいわれています。一〇万だろうと二〇万だろうと、たとえそれが千人であっても、子や孫たちの命とその国に幸あらんことを願った、わたしたちの声なのです。

集会に向かう道で、「わたし」は赤ちゃんを抱いた若い母親や、孫たちが安心して住める国にしたいという老人と言葉を交わし、「い

のち」への思慕を感じるようになります。この集会上、原発事故は「みんなの命と生涯にかかわる惨事」だという認識を持つ人びとが集っている、そして自分もその中に一瞬身を置いていたということが「わたし」の「感動」につながっているのです。近い人間とはかえって共有しにくい、「いのち」が脅かされているという認識を確かめ合う場として脱原発運動があり、そこに響く「わたしたちの声」が生を支えていくというラストシーン呼び込んでいくのです。

おわりに

ここまで見てきた通り、「わたし」は震災後の状況のなかで信頼できる友人たちとの二者間の応答として震災後の言葉を紡ぎ始め、状況や考え方の異なる近い人間と原発事故への危機感や怒りを共有することの難しさに直面していきました。そして「わたし」は脱原発集会への参加によって、日常生活の重さから離れたところで生じる一瞬の連帯を感じ、そこに希望を託していきます。

しかし、それを機に「わたし」が特定の友人たちとの関係から脱して不特定多数への呼びかけ・行動につながる「わたしたちの声」の獲得を目指すのかといえは、そうではありません。「わたし」は脱原発集会への参加を電話でA子に報告し、ルイに手紙を綴るという特定の友人たちとの言葉の関係へと帰っていくこととなります。このようにして二者間のコミュニケーションが重ねられていくとき、お互いの関係性や立場は少しずつ変化していくことになります。たとえば、「世間を見廻す余裕などありません」と言っていたA子は、「わたし」が脱原発集会に参加したことを喜んで「行った、そ

のことに意義があるのよ」という言葉を発しています。どうしてもくはないこととして、原発問題がA子に捉え直されることがわかります。

そして、ルイという特定の個人に宛てられた言葉は、「再び、ルイへ。」という小説のかたちで読者に開かれています。近い関係のなかで軋轢を感じながらも言葉を手渡していくことをあきらめないことが読者にも委ねられているのではないかと感じます。

付記 本稿は当日の質疑応答などを踏まえて加筆修正したものです。会場でご教示いただいたみなさまに感謝申し上げます。

注

- 1 井上光晴「突きだした事実の重さ」(第十八回群像新人文学賞選評)、『群像』一九七五年六月。
- 2 「芥川賞選評」、『文藝春秋』一九七五年九月。
- 3 黒古一夫は「林京子論」(『原爆とことば』三二書房、一九八三年、六一頁)において次のように述べている。「被爆作家林京子の原爆小説の一つの特徴は、『中略』被爆後三十年経っているという(時間)意識が作品内部に巧妙に取りこまれていて、現在と当時が絡み合いながら描写を作り上げているところに求めることができるのである。十四歳の少女の心に映った風景と四十歳を越え、結婚もし、子どもも作った一人の女の現在の心象とが無理なく混淆したところに独特な世界をつくっているのが、林京子の原爆小説なのである。おそらく林京子の胸内には、被爆時成人だった人たちの多くの手記や体験記、あるいは文学作品によって生々しい被爆の実情は繰り返

し記録されてきている、だから私は別な方法で(原爆=被爆)を主題として形象するのだ、という鮮明な方法意識が存在しているのだらう。」

4 大里恭三郎『「祭りの場」(林京子)——記録と批評の文体』、『国文学 解釈と鑑賞』一九八五年八月。

5 柄谷行人、中上健次、川村二郎「創作合評」、『群像』一九八二年二月。

林京子関連資料(評論・論文・書籍)

【一九七〇年代】 1 「第十八回群像新人文学賞 選評」、『群像』

一九七五年六月/2 宮原昭夫、黒井千次「対談時評一四 矢島輝夫「もうひとつの生活」 福沢英敏「哀しい男」 林京子「祭りの場」」、『文学界』一九七五年七月/3 「内にこもる怒りの情感 林京子著『祭りの場』」、『朝日新聞』一九七五年八月一日/4 「消えがたい

映像三〇年 控え目で落ち着いた文体 林京子著『祭りの場』」、『読売新聞』一九七五年八月一日/5 「芥川賞選評」、『文藝春秋』一九

七五年九月/6 林京子・野呂邦暢「昭和二〇年八月九日——芥川賞受賞作「祭りの場」をめぐる」、『文学界』一九七五年九月/7 遠

藤周作、後藤明生、水上勉「読書鼎談 林京子「祭りの場」 藤枝静男「異床同夢」」、『文藝』一九七五年一月/8 森敦、川村二郎、田

久保英夫「創作合評一六 血縁と神話 中上健次「枯木灘」 林京子「空罐」」、『群像』一九七七年四月/9 中上健次、古屋健三「対談時

評 小説家の覚悟」、『文学界』一九七七年五月/10 野間宏、佐々木基一、秋山駿「創作合評二〇 生存の底にあるもの 杉本研士「葛

の鬚り」 中村昌義「冬の木立」 林京子「黄砂」、『群像』一九七七年八月/11 岡松和夫、古屋健三「対談時評 再燃する過去 中野孝次「鳥屋の日々」 林京子「同期会」 橋本勝三郎「春また浅き」、『文学界』一九七七年一〇月/12 上田三四二、黒井千次、柄谷行人「創作合評二三 小説の中の生と死 藤枝静男「悲しいだけ」 古

井由吉「池沼」 林京子「記録」、『群像』一九七七年一月/13 木下順二、高橋英夫、三木卓「創作合評二五 文学のテーマたりえるもの 阿部昭「過ぎし楽しき年」 林京子「影」、『群像』一九七八年

一月/14 木下順二、高橋英夫、三木卓「創作合評二七 未精算の過去」について 林京子「ギヤマン ビードロ」、『群像』一九七八年三月/15 佐々木幸綱「鎮めきれない(過去) 林京子「ギヤマン

ビードロ」」、『文学界』一九七八年八月/16 中野孝次「新著月

評 事実と表現のあいだ 林京子「ギヤマン ビードロ」 開高健「ロ

マネ・コンティ一九三五年」、『群像』一九七八年八月/17 桶谷秀

昭「読む者の心を強くうつ力作 林京子「ギヤマン ビードロ」」、『海』

一九七八年九月/18 中上健次、津島佑子、三田誠広、高橋三千綱、

高城修三「われらの文学的立場——世代論を超えて」、『文学界』一九七八年一〇月 【一九八〇年代】 19 高橋英夫「情景と人間の息

づかい——林京子「ミッシェルの口紅」、『海』一九八〇年五月/20

秋山駿、清水邦夫、月村敏行「第六十一回 創作合評 林京子「無

きが如き」 小川国夫「親父の血痕」 津島佑子「幻」、『群像』一九八一年一月/21 小田実、松本健一、三田誠広「読書鼎談 林京子

「無きが如き」 小島信夫「美濃」、『群像』一九八一年一月/22 柄谷行人、中上健次、川村二郎「第七十四回 創作合評 増田みず子

「沈む部屋」 津島佑子「浦」 林京子「無事」 中里恒子「家の中」、『

『群像』一九八二年二月／23 駒井珠江「核体験の「風化」に抗して——林京子の近作をめぐって」、『民主文学』一九八二年八月／24
黒古一夫「原爆とことば 原民喜から林京子まで」三一書房、一九八三年／25 「核戦争の危機を訴える文学者の声明」署名者＝編集世話人『日本の原爆文学』全一五巻、ほるぷ出版、一九八三年／26
磯田光一、日野啓三、川村二郎「第九十五回 創作合評 井上光晴「赤串怪談」 林京子「三界の家」 岩橋邦枝「形見」、『群像』一九八三年一月／27 「第十一回川端康成文学賞発表 大江健三郎「河馬に噛まれる」、林京子「三界の家」、『新潮』一九八四年六月／28
平山三男「林京子論——意味としての原爆文学」、『関東学院大学文学部紀要』四三号、一九八五年三月／29 中野孝次、長岡弘芳「対談 原爆文学をめぐって」、大里恭三郎「『祭りの場』(林京子)——記録と批評の文体」、香内信子「林京子論」、長岡弘芳「原爆文学の輪郭」、いずれも『国文学 解釈と干渉』一九八五年八月／30 高井有一、三枝和子、三木卓「第一二一回 創作合評 林京子「谷間」 丸谷才一「鈍感な青年」 大庭みな子「ろうそく魚」 村上春樹「ねじまき鳥と火曜日の女たち」、『群像』一九八六年二月／31 小林八重子「林京子の原爆文学——『ギヤマン ピードロ』を中心に」、『民主文学』一九八六年八月／32 小島信夫、三木卓、川村湊「第百三十七回 創作合評 丸谷才一「樹影譚」 山本道子「手首」 林京子「虹」、『群像』一九八七年五月／33 後藤明生、秋山駿、松本健一「第百四十回 創作合評 林京子「二月の雪」 梅原稜子「篝火」 富岡多恵子「白光」、『群像』一九八七年八月／34 川西政明「解説 林京子小説、『祭りの場・ギヤマン ピードロ』 講談社芸文庫、一九八八年／35 小林八重子「旅の梯子」とその周辺——林京子論ノート」、『民

主文学』一九八八年六月／36 高橋英夫、畑山博、松本健一「第六四回 創作合評 村田喜代子「ルームメート」 立松和平「金魚買ひ」 林京子「亜熱帯」、『群像』一九八九年八月 【一九〇年代】
37 早川雅之「ナガサキを描いた三人の女流作家——佐多稲子・後藤みな子・林京子」、『社会文学』第四号、一九九〇年七月／38
川村湊「今月の芸文書 田久保英夫「しらぬひ」 林京子「やすらかに今はねむり給え」 島田雅彦「ロココ町」 佐木隆三「身分帳」
立松和平「薬土の家」、『文學界』一九九〇年九月／39 田久保英夫、川村二郎、宮内豊「第一八八回 創作合評 林京子「芝居見物」
高野亘「タイムトライアル」 竹野雅人「王様の耳」、『群像』一九九一年八月／40 細窪孝「水上勉「醍醐の桜」と林京子「熔岩」、『文化評論』一九九二年二月／41 黒古一夫「原爆文学論——核時代と想像力」 彩流社、一九九三年／42 内海宏隆「長崎原爆の語り部として——林京子「祭りの場」について」、『国語科通信』第八五号、一九九三年二月／43 中野孝次、田久保英夫、富岡幸一郎「第二二一回 創作合評 竹野雅人「私の自叙伝前篇」 林京子「旗」 古井由吉「木犀の日」、『群像』一九九三年八月／44 藪禎子「林京子——二つの時」、『新日本文学』一九九三年秋号／45 中野孝次「青春」 林京子——明らかなった戦後への挽歌」、『新潮』一九九四年四月／46 千石英世「今月の芸文書 大庭みな子「むかし女がいた」 林京子「青春」 笹野頼子「レストレス・ドリーム」 村上政彦「アラブの電話」、『文學界』一九九四年五月／47 小林八重子「わが内なる「その日」を見給え 林京子「祭りの場」、『民主文学』一九九四年八月／48 三枝和子、金井美恵子、高橋源一郎「第二二六回 創作合評 林京子「まち」 柳美里「石に泳ぐ魚」 高井有一「桜の茶屋」、『群

像』一九九四年一〇月／49 青木洋子「八月九日に収斂される思い
林京子『ギヤマンビードロ』』、『民主文学』一九九五年六月／50
中野孝次、三枝和子、井口時男「創作合評 村田喜代子『硫黄谷心中』
林京子『玩具箱』』、『群像』一九九六年九月／51 「第二十七回九州
芸術祭文学賞 選評」、『文學界』一九九七年四月／52 渡邊正彦
「現代作家を読む 林京子——長崎・一九四五年八月九日の語り部」、
『月刊国語教育』一九九八年四月／53 岡松和夫、坂上弘、井口時
男「第二七一回 創作合評 林京子『予定時間』 車谷長吉『白黒忌』」
村田喜代子「夜のヴェーナス」、『群像』一九九八年七月／54 大
東文化大学院文学研究科日本文学専攻渡邊澄子研究室編『林京子
研究』大東文化大学院日本文学科・院生研究室、一九九九年／55
Davinder L.Bhoniak “TEMPORAL DISCONTINUITY IN THE ATOMIC
BOMB FICTION OF HAYASHI KYOKO”, “Oe and Beyond: Fiction in
Contemporary Japan” University of Hawai'i Press 1999 / 59 阿武正英
「林京子論ノート」、『日本文学論集』第二三号、一九九九年三月／5
7 高井有一、木崎さと子、川村湊「第二八七回 創作合評 林京子
「長い時間をかけた人間の経験」 岩阪恵子「日が傾いて」 瀬戸内
寂聴「髪」、『群像』一九九九年一月 【二〇〇〇年代】 58 神
奈川文学振興会編「原爆文学展——ヒロシマ・ナガサキ 原民喜から
林京子まで」神奈川近代文学館、二〇〇〇年／59 高井有一、加藤
典洋、藤沢周「第二九八回 創作合評 山田詠美「M E N U」 林京
子「トリニテイからトリニテイへ」、『群像』二〇〇〇年一〇月／60
内海宏隆「林京子『祭りの場』論——序説」、『芸術至上主義文芸』
二六号、二〇〇〇年一月／61 川西政明「解説 黄浦江の風」、『上
海・ミッシェルの口紅 林京子中国小説集』講談社文芸文庫、二〇〇

一年／62 小林孝吉「原爆体験から記憶の文学へ——林京子と原民
喜の文学」、『社会文学』一六号、二〇〇一年／63 「第五十三回野
間文芸賞発表 林京子『長い時間をかけた人間の経験』、『群像』二〇
〇一年一月／64 マヌエラ・スリアノ「林京子のアメリカ体験」、『日
本文学研究』四〇号、二〇〇一年二月／65 内田友子「絶滅」とい
う想定——林京子「長い時間をかけた人間の経験」について、『山口
国文』二四号、二〇〇一年三月／66 林京子、徐京植「対談 ヒロ
シマ・ナガサキを「人類の悲劇」になしうるか」、『世界』二〇〇一年
九月／67 林京子「講演」八月九日からトリニテイまで、林京子、
内海宏隆、河野基樹「鼎談」林京子さんを囲んで、『芸術至上主義文
芸』二七号、二〇〇一年一月／68 内海宏隆「林京子『祭りの場』
論——初期作品の考察を中心として」、『芸術至上主義文芸』二七号、
二〇〇一年一月／69 井上ひさし、小森陽一編著『座談会昭和文
学史』五巻、集英社、二〇〇四年／70 川西政明「解説 カナと一
緒に歩く、長い時間をかけた人間の経験」講談社文芸文庫、二〇〇
五年／71 黒古一夫「21世紀の若者たちへ4 原爆は文学にどう
描かれてきたか」八朔社、二〇〇五年／72 曾根愛子「長崎の原爆
投下による傷、痛み 林京子『ギヤマンビードロ』、『かりんかりん
女性学・ジェンダー研究』五号、二〇〇五年／73 中山和子『平野
謙と「戦後」批評』翰林書房、二〇〇五年／74 林京子『林京子全
集』全八巻、日本図書センター、二〇〇五年／75 渡邊澄子『林京
子——人と文学 “見えない恐怖”の語り部として』長崎新聞社、二
〇〇五年／76 津久井喜子『破壊からの誕生——原爆文学の語るも
の』明星大学出版部、二〇〇五年／77 浦川徹「少女の哀悼劇——
林京子「雛人形」について」、『学習院大学国語国文学会誌』四八号、

二〇〇五年三月／78 大橋毅彦「自責と矜持と——林京子『予定時間』を読む」、『人文論究』五五号、二〇〇五年五月／79 深津謙一郎「記憶を分有すること——林京子と文学の領分」、『千年紀文学』五七号、二〇〇五年七月／80 林京子、富岡幸一郎「生命と核——インタビュー」、『表現者』八号、二〇〇六年九月／81 黒古一夫「林京子論 「ナガサキ」・上海・アメリカ」日本図書センター、二〇〇七年／82 曾根愛子「林京子「ギヤマン・ビードロ」…ガラスの中の原爆」、『かりん かりん 女性学・ジェンダー研究』七号、二〇〇七年／83 田崎弘章「後日談であることを拒絶する長崎原爆文学——女性視点と日常性」、『人間文化研究』五号、二〇〇七年三月／84 井上聰「林京子の上海——その「生」と「死」を中心に」、『解釈』五四号、二〇〇八年一月／85 菅聡子「林京子の上海・女たちの路地——アジールの幻想」、『立命館言語文化研究』一九号、二〇〇八年二月／86 野坂昭雄「長い時間をかけた人間の経験」論」、松永京子「長い時間をかけた作家の経験——「汚染の言説」として読む「原爆文学」」、『原爆文学研究』七号、二〇〇八年二月／87 渡邊澄子、スリアーノ・マヌエラ著『日本の作家100人 林京子 人と文学』勉誠出版、二〇〇九年 **【二〇一〇年代】** 88 ジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く——日本文学と原爆』水島裕雅、成定薫、野坂昭雄監訳、法政大学出版局、二〇一〇年／89 横手一彦「長崎原爆を長崎浦上原爆と読みかえる——林京子『長い時間をかけた人間の経験』を軸に」、『社会文学』三一号、二〇一〇年二月／90 鈴木智之「引き裂かれた（顔）の記憶——林京子「道」（一九七六年）における死者の現れ」、『社会志林』二〇一〇年九月／91 川村湊「原発と原爆——「核」の戦後精神史」河出ブックス、二〇一一年／92 黒古

一夫編『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ——核時代を考える』勉誠出版、二〇一一年／93 陣野俊史『戦争へ、文学へ「その後」の戦争小説論』集英社、二〇一一年／94 高木信「林京子「空罐」の〈亡霊〉的時空、あるいは記憶の感染の（不）可能性」助川幸逸郎、相沢毅彦編『可能性としてのリテラシー教育 21世紀の〈国語〉の授業にむけて』ひつじ書房、二〇一一年／95 林京子、「聞き手」島村輝『被爆を生きて——作品と生涯を語る』岩波ブックレット、二〇一一年／96 陣野俊史『世界史の中のフクシマ——ナガサキから世界へ』河出ブックス、二〇一一年／97 井上聰「上海の河（江）をめぐる日本の現代作家たち——横光利一と林京子の『上海』を中心に」、『解釈』五七号、二〇一一年一月／98 深津謙一郎「八月九日」の〈亡霊〉——林京子「ギヤマン・ビードロ」論」、『共立女子大文芸学部紀要』五七集、二〇一一年一月／99 陣野俊史「林京子、ナガサキ、原爆と核の不安」、『青春と読書』二〇一一年六月／100 新・フェミニズム批評の会編『3・11フクシマ』以降のフェミニズム——脱原発と新しい世界へ』御茶の水書房、二〇一二年／101 外岡英俊「解説」、『希望』講談社文芸文庫、二〇一二年／102 藤井貴志「『廢物』への眼差し——芥川龍之介「雛」と林京子「雛人形」、『芥川龍之介研究』二〇一二年／103 趙夢雲「虹口・一九三八子供の目線」林京子「老婆の路地」を媒介に」、『Asia：社会・経済・文化』二〇一二年／104 松木新「林京子が問いかけるもの」、『民主文学』二〇一二年八月／105 石川巧、川口隆行編『戦争を〈読む〉』ひつじ書房、二〇一三年／106 岩川ありさ「記憶と前未来——林京子「祭りの場」と「長い時間をかけた人間の経験」をつないで」、『言語情報科学』一一号、二〇一三年／107 川村湊「震災・原発文学論」インパクト出

版会、二〇一三年／108 小谷一明、巴山岳人、結城正美、豊里真弓、喜納育江編『文学から環境を考える——エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版、二〇一四年／109 村上陽子『出来事の残響——原爆文学と沖縄文学』インパクト出版会、二〇一五年／110 和田博文、黄翠娥編『異郷』としての大連・上海・台北』勉誠出版、二〇一五年／111 青来有一「原爆と文学のあいだ——原民喜、大田洋子、林京子再読のすすめ」、『文学界』二〇一五年九月／112 青来有一「解説」、『やすらかに今はねむり給え 道』講談社文芸文庫、二〇一六年／113 黒古一夫「解説 ヒロシマ・ナガサキ、そしてフクシマ」、『谷間 再びルイへ。』講談社文芸文庫、二〇一六年／114 村上陽子「原爆文学の三〇年——一九八五年以後の林京子文学を中心に」『社会文学の三〇年——バブル経済冷戦崩壊 3・11』菁柿堂、二〇一六年／115 熊芳「林京子『予定時間』論」、『異文化』一七号、二〇一六年四月／116 黄亮「語りのポリテクス——林京子の『路地』に潜在するアメリカ」、『社会文学』四五号、二〇一七年／117 小林八重子「土にかえるはな——林京子をおくる」、『季論』二〇一七年／118 黒古一夫「追悼 林京子さんを思う 核の状況 あらがう人描く」、『長崎新聞』二〇一七年三月七日／119 中島美恵子「追悼 作家・林京子さんの思い出 またいらっしやい」、『長崎新聞』二〇一七年三月一七日／120 青来有一「林京子さんを悼む 八月九日の少女」、『長崎新聞』二〇一七年三月二〇日／121 青来有一「追悼 林京子 いつも震えている魂」、『文学界』二〇一七年五月／122 「追悼 林京子」、『すばる』二〇一七年五月／123 「追悼 林京子」、『群像』二〇一七年五月／124 鈴木比佐雄「作家論 原爆と原発の「内部被曝」の危険性を内視した人——

林京子氏を悼んで」、『Coal Sack 石炭袋 詩の降り注ぐ場所』九〇号、二〇一七年六月／125 小林八重子「林京子小論——晩年の諸作品について」、『民主文学』二〇一七年八月